

## 展示作品一覧

A Harlot's Progress	「遊女一代記」(「娼婦一代記」)(1732) 6枚
A Rake's Progress	「放蕩一代記」(「放蕩息子一代記」)(1735) 8枚
Scholars at a Lecture	「講義を聴く学生」(1736)
Before and After	「ことの前と後」(1736) 2枚
Sleeping Congregation	「居眠り会衆」(1736)
The Four Times of the Day	「1日の四つの時」(1738) 4枚
Strolling Actresses dressing in a Burn	「納屋で衣裳をつける女旅役者」(1738)
Characters and Caricatures	「性格と戯画」(1743)
Marriage à-la-Mode	「当世風結婚」(1745) 6枚
Industry and Idleness	「勤勉と怠惰」(1747) 12枚
O the Roast Beef of Old England, or the Gate of Calais	「わがイングランドのロースト・ビーフ、別名カレーの門の印象」(1748/9)
The Four Stages of Cruelty	「残忍の四段階」(1750/1) 4枚
Beer Street and Gin Lane	「ビール街」と「ジン横町」(1750-1751) 2枚
The March to Finchley	「フィンチリーへの出撃」(1750 Cook版)
Analysis of Beauty	「美の分析」(1753)
Satire on False Perspective	「誤った透視画法を糾す」(1754 Cook版)
An Election	「選挙」(1755-1758) 4枚
The Bench	「裁判官」(1758)
The Cockpit	「闘鶏場」(1759)
The Five Orders of Periwigs	「かつらの五様式」(1761)
Shrimps!	「小海老はいかが!」(「エビ売り娘」)(1782 Jane Hogarth版)
Gulielmus Hogarth	「ホガース自画像」(1748-1749 Cook版)

## 問いかけるホガース

大河内 暁 男

1. 絵画を見る立場
2. 時代とホガースの人となり
3. 作品履歴
4. 版画販売の工夫 —マーケティング—
5. ホガースの問いかけ

第4回経営シンポジウム

「問いかけるホガース」

大河内暁男

2005.12.2

大河内です。お配りした目次に沿って、ホガスについてお話いたします。

## 1. 絵画を見る立場

絵を見るとき、何が描かれているのか、そこに当然誰もが関心を持ちます。それは描いた画家の主観的な目的とは別の話です。描かれているものはあるいは肖像や人物であり、静物であり、風景であったり、人々の活動や催物の情景であったり、時に極端な抽象画であったり、様々です。それを見て人はあるいは美しいと思ひ、あるいは楽しいと思ひ、あるいは感動を覚え、また心を癒されると感じます。油絵にせよ日本画にせよ、豊かな色彩で描かれていますから、その美しさも魅力です。そうしたことを期待して、人は美術館を訪れます。

ところがこの展覧会のホガスの銅版画の場合、ご覧のように色は黒一色ですし、題材はと言えば、花など静物でも肖像でも風景でもありません。もっぱらホガスが生活していた18世紀中葉のイギリス社会、それもロンドンの町なかにおける人々の暮らしや行動が題材とされ、しかも富裕層の不正、不倫、下層社会の貧困と退廃、殺人、人間の残虐な本性など、どうもこれを見て目を楽しませたり、心を和ませるには不向きなものが多いのです。

ホガスは元来油絵画家として優れた腕をもち、とくに人間の瞬間的表情をとらえることでは一頭地を抜いており、その点は版画についても同じで、たとえばこの会場に展示してある「小海老はいかが！」など、少女の呼び売りの声がいまにも聞こえてきそうな楽しい作品です。その彼がなぜ人の目を楽しませることからは程遠いと思われる題材を好んで描いたのでしょうか。

そう思って作品を見直しますと、一枚一枚の画には、ホガスの時代の社会事象や話題の人物が大変詳しく描写されており、そこに詰め込まれている情報を読み解いて行くと、登場人物が誰であるのか、見当がつかます。それは当時の人々が見れば、すぐにわかる顔に違いありません。そればかりか、たとえば画の片隅にいる一匹の犬にも意味が込められていることを知ります。諷刺の脇役だったのでしょう。

こうした性質の版画ですから、当時世の中の評判になったことも領けませんが、それだけに後世のしかも異国の私たちから見れば、彼の画は理屈抜きで楽しめるというものではないと思います。画の意図を理解するには歴史の多少の知識を必要とします。そして理解してみると大変面白い作品で、美術品というよりもむしろ歴史史料として重要であろう、このように私は考えています。

個々の画については目録に簡単な解説をつけましたので、参照しながら実物をご覧ください。何に注目してこれらの画を見るか、それは見る人それぞれの立場や関心によって様々でしょう。この画はこう理解すべきだなどというものではありません。

## 2. 時代とホガスの人となり

目録に付けました年表の通り、ホガスは1697年に生まれて1764年に亡くなりました。版画の主要部分は大体1730年代から1750年代に集中しています。これは日本でいうと享保の改革があった8代将軍吉宗の時代にあたります。

18世紀前半という時代は、イギリスの歴史においては大変面白い時代です。どういうことかと申しますと、少し話が細かくなりますが、1642年に市民革命があって、1688年に名誉革命、これで一応イギリスの旧体制が崩れて、新体制が、あるいはブルジョワ社会が出来上がります。

その後、1707年にイングランドとスコットランド、これは別々の王国だったのですが、この両国が同一の王様を戴いて、連合した王国になり、一人の王様が二つの王国の国王を兼ねることになりました。そのことをちょっと記憶に留めていただきたいのです。

18世紀に入ると、イギリスは経済的には大発展し、対外的にも圧倒的な競争力を持つようになります。ところが文化的にはどうかと言うとヨーロッパ大陸のほうが優れている。イギリスは新興国で、文化的にはまだ野蛮だと考えられている時代です。ですから、イギリスの貴族たちは、文化に憧れて大陸に出かけて行きます。1年2年と相当長期間、自分の子弟を大陸、特にフランスに留学させることが流行りとなりました。これはグランド・ツアーと呼ばれていますが、そのグランド・ツアーから帰国するときに、貴族の子弟たちは、金の力に任せて、美術品を大量に買い込んで持ち帰ってくるのが普通でした。現在イギリスを旅行して方々の美術館に行くと、たくさんの名画があります。そのかなりのものは、今お話したような経路で持ち込まれた大陸の芸術家の作品です。イギリスが経済的に繁栄していたからこそ、こうしたことが出来たわけです。

ところが国内政治の側面について見ますと、イングランドとスコットランドが一体化した王国になりましたが、経済的にイングランドが優位なものですから、実質的には、イングランドがスコットランドを押さえ込んだ形での連合王国だったわけです。その押さえ込まれたスコットランドが、イングランドの支配を脱してもう一度自分たちの自主性を回復したいと思いました。そこで、名誉革命で破れた旧体制のカトリック系王族を担ぎ、フランスの後押しを受けて反革命を試みる。これが18世紀前半に何度かありましたが、その最後のものが1745年のジャコバイトの反乱と呼ばれているものです。

もっともこの反乱はあっけなく鎮圧され、これで旧体制派はほぼ息の根を止められて、以後イングランド中心のブルジョワ社会が安定します。こうした市民革命から始まる一連の革命の勝ち組みがブルジョワ派です。この勝ち組みは勝った勝ったでどんちゃん騒ぎをして、政治的腐敗、道徳的退廃を引き起こします。どこかの国みたいですが、そういうことが18世紀20年代から40年代を通じてひどくなって来ました。

それから、経済的に大きい力を得た新興の金持ち階層が、政治と組んでどんちゃん騒ぎをやりまします。これもまた、どこかの国で起こっていることに似ています。ところが、どんちゃん騒ぎの反面で、社会的に脱落した下層の人々の世界、ここでは住む家もなく、酒に溺れた、救い難い退廃的雰囲気漂う。

このような状況、社会のあちこちに溜まる不平、不満、批判、それを鋭く受けとめて画にしたのがホガスだった、そう見てまず間違いないと思います。ですからホガスの画は、あまり楽しくない場面がたくさん出て来るわけです。

ところで目次に「ホガスの人となり」と書きました。ホガスはどういう人間だったのだろうか、その点を次にお話しいたします。ホガスの自画像（33頁図1）があります。これは、よく見れば奇妙な自画像だということに気づかれると思います。まず服装は普段着、それも多分仕事着で、帽子をかぶっている。楕円形の鏡の形をした部分に肖像が描いてあり、その肖像部分は3冊の本の上に乗っています。この3冊の本は何かと言うと、版画では刻まれてないのですが、原画、元の油絵を見ると、それぞれシェイクスピア、ミルトン、それにスウィフトの著作であることが分かります。いずれもホガスより少し前に活躍した人たちで、イギリスの文学界の代表的存在です。

スウィフトは皆さんも「ガリバー旅行記」で知っていると思います。ミルトンは「失樂園」で有名な詩人、シェイクスピアは「ハムレット」などシェイクスピア劇の作者です。そうした大先輩の作品の上にホガースは自分の肖像を置いているのです。この構図の意味は、自分の画業の基礎がシェイクスピアたちのようなイギリス文化を代表する先行者の上に乗っている、つまり自分の基礎はイギリス文化にある、ということです。先程お話したグランド・ツアー、何でもかんでもヨーロッパ大陸から持ち込み、それが高級文化だと囃す風潮に対する批判がここに込められているわけで、イギリスにはイギリスの優れたところがあり、自分はそれでやるんだという意思表示なのです。

犬は彼の愛犬ランプで、主人の主義主張を守っています。右下に油絵用のパレットがありますが、このパレットにS字型の曲線が見えます。これは彼がSラインと呼んでいるもので、人物を描くときS字型を基本に描くと一番自然で綺麗に見える、人の姿勢でも動きでもS字型の基本線を基にすると一番いい、そういう美学的な主張を示すものです。

ですから、これらを全部合せてみると、彼の思想、主張が端的に表現されている、そういう自画像です。ホガースはそういう人物でして、イギリスを愛する、大変自己主張の強い人だということになるわけです。

### 3. 作品履歴

ホガースがどういう作品をいつ製作したかについては、お手元の図録目次をご覧になりながら聞いていただきたいと思います。細かいことは申しませんが、彼は元来挿絵や広告の絵などを描いて暮らしを立てていましたが、1726年に「ヒューディブラス」という最初の物語組み絵を発表しました。これは展示してありませんが、中身はセルバンテスのドンキホーテを基にした物語です。それが割合うまくいったので多少自信が生まれました。そして1729年に自分のお師匠さんの娘ジェインと駆け落ちし、独立して版画の商売を始めます。

その後1732年に「遊女一代記」（または娼婦一代記）（A Harlot's Progress）を発売します。これは前年から原画である油絵を描き銅版原版を作り始めたものですが、油絵は消失してしまい、残っていません。版画のほうは、面白い題材で絵の出来も良いので、発売と同時に評判となりました。その翌年1733年に彼はロンドンのど真ん中レスタフィールド（現在の Leicester Square）に店舗兼住宅を入手して、そこで自分の版画の販売を始めます。

ところが偽物が大量に出回りました。ホガースの本物よりも偽物のほうがはるかに多いと言われています。怒ったホガースは、版画家にも著作権があるべきだ、本に著作権があるように、版画家も著作権を欲しいと主張し、運動しました。その結果「版画家の著作権法」（Engravers' Copyright Act）が1735年に成立しました。この法律は Hogarth's Act とも呼ばれています。

著作権法が成立したので、版画も勝手に偽物を作ることは出来なくなりました。ホガースは以後用心深く、1735年法のもとで自分が画を描き、彫版し、印刷したということを、版画の売価、発売年とともに、版画の一番下に刷り込むことにしました。大きい字で書いてある場合もあり、読みにくい場合もありますが、とにかく全部丹念にコピーライトをつけました。この権利は14年間で、それほど長いものではないのですが、小説などと同じように著作権を主張し確保する努力をしたわけです。

さて、著作権法が出来ると同時に、ホガースは「放蕩一代記」（または「放蕩息子一代記」）

(A Rake's Progress) という続きものを売り出します。その後いろいろな作品が続々と出版されますが、おそらく、自分の権利が法によって守られていると、安心したのではないのでしょうか。

1745年には「当世風結婚」(Marriage à-la-Mode) が発売されます。皆さんから見て右手に並べてあります。この作品はこうした種類の版画の最高傑作だと言われているものです。ただし原画はホガースが描きましたが、彫版については、腕のよい彫師をフランスから呼び寄せて彫らせ、彼らの名前は画の下に入っています。

この後1747年に出した「勤勉と怠惰」は、長い12枚の物語版画で、評判の高いものでした。多分よく売れたのだと思います。そこで彼はロンドン郊外のチジックに仕事場を兼ねた別宅を購入し、町中を離れてここに事実上永住することになります。この家は、現在ですとヒースロウ空港からロンドン中心部に通じるM1という高速道路が市街地に入る入り口、その右手道路脇にあり、標識も出ています。家の写真はパネルに展示してあります。ここで製作に励むのですが、よほど気に入ったのでしょうか、1764年の死ぬ前日までホガースはこの家に住んでいました。

#### 4. 版画販売の工夫 —マーケティング—

版画を発売するに当たって、ホガースはどのような販売の工夫、現代風に言えばマーケティングをしたのでしょうか。彼のやり方を少々お話しします。さきにも触れた一番最初の「ヒューディブラス」の場合は画商を通しましたが、それから後は自分で宣伝し、1733年以後はレスタフィールドの自分の店で売ることになります。店頭で原画を展示し、新聞に広告を載せ、こういう版画が出来るかと宣伝し、予約を募ります。そして半額だけ予約金を受け取り、版画が完成したときに残りの半金と引き換えに画を渡すのです。予約も引き渡しも自分の店でやるのですから、直売制というわけです。前金を取れるということは、ホガースの版画家としての名声が確立していた証でしょう。

それからもう一つ、直売制と関係することですが、画の価格を明示し、定価販売を行いました。先にも述べたように、版画の右下に販売価格が刷り込まれています。小さい字なので分かりにくいのですが、みんな値段が表示されており、その価格で売りました。

大体どれくらいの値段か、それはお配りした目次の紙の右半分に印刷してある「ホガースの版画定価表」という資料をご覧ください。これは1754年当時にホガースの店で売っていた画の定価表です。この値段は発売当初に版画に刷り込まれていた値段と同じです。画によって値段がかなり違って見えますが、それは主として版の大きさ、画の大きさと組み物の枚数によります。枚数が多いものは当然値段が高くなります。しかし1枚当たりで計算すると、大判の画で5シリング、小型版だと1シリングです。シリングは現在では使われていない貨幣単位ですが、1ポンドの20分の1が1シリングです。

そのようなことで、直売かつ定価販売をしていたわけ

ホガースの版画定価表

Print Title	Price
Marriage a-la-mode in six prints	1 s. 6 d.
Harlot's Progress, in six prints	1 11 0
Rake's Progress, in eight prints	2 2 0
Four times of the Day, in four prints	1 0 0
Strolling schoolboys dressing in a Barn	0 5 0
Midnight Conversation	0 5 0
Southwark Fair	0 5 0
Before and After, two prints	0 5 0
Dillettical Post	0 3 0
Enraged Musician	0 3 0
Various Characters of Heads, in five groups	0 2 6
Beer Street and Gin Lane, two prints	0 3 0
Four Stages of Cruelty, four prints	0 6 0
Moles brought to Pharaoh's Daughter	0 7 6
Calais, or the Roast Beef of Old England	0 5 0
Paul before Felix	0 7 6
Paul before Felix in the manner of Rembrandt	0 3 0
Bishop of Winchester	0 3 0
The effects of Idleness and Indolence, exemplified in the Conduct of two Fellow-Prentices, in 10 twelve prints	10 12 0
Lord Lovat	0 1 0
Country-Inn Yard	0 1 0
Sleeping Congregation	0 1 0
March to Finchley	0 10 6
Mr. Garrick in the Character of King Richard the third	0 7 6
Columbus breaking the Egg	0 1 0
Frontispiece	0 3 0
N. B. If any one purchases the whole together, they will have them deliver'd bound, at the Price of ten Guineas, and a sufficient Margin will be left for Framing.	
Where likewise may be had,	
The ANALYSIS OF BEAUTY, with two explanatory Prints, price 15 Shillings.	
Four large prints of the same	2 2 0
Done in England	0 2 0
The British	0 1 0

D. Bindman, Hogarth and his Times, 1997, p.89

ですが、ホガースは、画商に頼らなくても自分の版画が売れるんじゃないかと、ある程度の自信があるからこそ、こうした販売方法をやったのだと思います。

それから変わった面白い売り方としては、「フィンチリーへの出撃」(10頁図C)があります。これは題材としては、さきにお話ししたことですが、1745年にスコットランドのジャコバイト革命軍がロンドンに押し寄せて来る、それに対してロンドンのイングランド軍が迎え撃つ、その進軍の絵です。原画を店頭で陳列し、版画は発売枚数2,000部限定で、予約金7シリング6ペンスで予約を受け付けました。ところがその予約金に3シリング追加して支払うと、展示してある一番元の油絵を貰える抽選に加われるというのです。そういう籤の権利を付けて、買い手の購入意欲を掻いたのです。

この籤は、ホガースの計算から言うと、仮に版画が全部売れ、予約者全員が籤に加わったとすれば、追加金は一口3シリングで2,000口限定ですから、合計300ポンドという金額になります。この収入と引き替えに、版画申込者のなかの誰か一人に原画が引き渡されるのです。要するに1枚の油絵が300ポンドで売られるわけです。この金額は実は大変高い額でして、それ以前に売れたホガースのどの絵よりも高い。彼からすれば、なかなかうまい計画でした。

このようないろいろな知恵を絞って、ホガースは販売促進をやったわけです。もちろん現代のマーケティングと比べればお粗末で、むしろセールスの技術だったと言えればそれまでの話しですが、このようなことをやると案外乗ってくるファンがいるということを彼は掴んでいたと思われま

す。最後にもう一つ、版画の売込みと関係があると考えられる画法上の問題に触れておきます。冒頭でも申しましたが、ホガースの絵や版画の大きな特徴は、人物の顔の瞬間的表現の捕え方、描写力が非常に優れていることにあると思います。彼は沢山の人物を描いていますが、顔が大きく描かれている絵というと、先程お話しした自画像が有名です。それともう一枚、ホガース自身は版画にしなかったもので、「小海老はいかが！」(Shrimps!)または「エビ売り娘」という海老売り少女の絵(9頁図B)が代表的なものです。この2枚は会場の最後に展示してあります。

その他の作品は大体人物が集合して描かれています。その一つ一つの絵を見ますと、どれも中心になるような人物が一人あるいは何人か登場するほか、多数のいわば「その他大勢」がいます。そういう人物の表情を見ると、一人一人の表情が詳細的確に捕えられており、それぞれが何を考えているのか、何をしようとしているのか、どういう心理状態にあるのか、そこまで想像出来ます。これは普通の集合画の人物の描き方と異なる点だと思います。とくに中心人物については誰がモデルか、実在の人物をほぼ特定出来るのです。これもホガースの人気の原因の一つでしょう。

ホガースの特徴の最後になりますが、彼は絵に時間を描き込みます。彼が得意とした物語の組もの版画には当然時間の経過が含まれますが、1枚の絵でもそこに歴史あるいは時間の経過が描き込まれています。

その一例として「わがイングランドのロースト・ビーフ」(9頁図A)があります。奇妙な題名ですが、これを見ますと、先に述べたスコットランドのジャコバイトの反乱があって、それが敗れた。ジャコバイトが失敗したので、彼らを応援していたフランスががっかりしており、破れてよれよれの兵隊の服が疲弊を表わしている。その人たちの眼前を、イングランド産のうまそうなロースト・ビーフの塊がこれ見よがしに運ばれ、それを皆が羨ましそうに眺めている。ロースト・ビーフに象徴されるイングランドは誇らしげに頑張っている。そういう一連の歴史と時間的経過が、この

1枚の絵に入っているわけで、イングランドの天下なのだということが、この絵の表題の含意なのです。

ロースト・ビーフと言いますと、イギリスは美味しい食べ物がないから「ロースト・ビーフ、ロースト・ビーフ」と言うんだと悪口を言う人もいますが、イングランド人にとってロースト・ビーフは御馳走の代名詞であり、それを他国人は涎を垂らして羨んでいる。うまいものはイングランド、政治もイングランドが強い、どんなもんだとイングランドの力を誇示するイギリス鼻の絵のわけです。

この絵に限らず、どの絵を見ても特別な意味がそれぞれあるわけですから、それを読み取った人が、あるいは「そうだ、そうだ」と言って手を打つ、あるいは正義の念に駆られて憤慨する。あるいは苦々しく思う人も当然出てくるし、絵によっては思わずニヤリとします。注意してご覧になると、どれがニヤリとする絵か気付かれると思います。

ともかくこうして見る人に何らかの共感呼び起こさせる。そこから先がホガスにとって大事なのですが、そういう共感を覚える絵だから買おうというお客さんが出てくる、そこを多分ホガスは狙ったのではないのでしょうか。

#### 5. ホガスの問いかけ

ホガスの版画を題材で分けてみると、一生懸命働かなくてはいけない、怠惰や悪事はいけないというような教訓ないし道徳ものが目立ちますが、さらに昔からの社会的制度に欠点があるとして実例をあげて批判する政治もの、不倫など人間の本性を突いたもの、大人の犠牲になる子供、さきほどの「ロースト・ビーフ」のようなイギリス主義を主張するもの、それに芸術論などいろいろな分野があります。

したがって諷刺や批判の対象は実にさまざまです。例えば教会も批判するし、裁判官も治安判事も法律も制度も法の運用も批判します。墮落した下層民の生活態度を批判するかと思えば、オックスフォード大学に代表される上流子弟の教育のあり方、にわか成金や没落貴族、腐りきった上流社会にも鋭い批判を浴びせます。とにかくおかしいと思うものをみんな批判してしまうわけです。

ところが、批判されて槍玉に挙がっている貴族、宗教家、大商人、政治家たちが、どういうわけか競ってホガスの版画を予約購入して、彼との付合いを求める。ですから、諷刺されてやられている人たちが、大喜びでホガスの絵を買っているという、何か大変皮肉な、奇妙な状況です。ホガスに言わせれば「お前さんたちもっとよく考えてみな、そんなことをしていいのか、真綿で首を絞められているんだよ」、そういうことになっているのです。こうした状況を念頭に、彼の技巧と皮肉を一つ一つ見て、楽しんでいただきたいと思います。

司会　大河内先生、ありがとうございました。非常に興味深いお話しで、もう一度ぐるっと回ってご覧になって、確認していただけるとよろしいと思います。



図A O the Roast Beef of Old England, or the Gate of Calais (1748/9)  
「わがイングランドのロースト・ビーフ、別名カレーの門の印象」



図B Shrimps! 「小海老はいかが！」 (1782 Jane Hogarth 版)



図C The March to Finchley 「フィンチリーへの出撃」(1750 Cook 版)